

八重山諸島の考古学

10. パナリ期における島産陶器の生産

人々が生活に利用する容器としてパナリ期に焼かれたのは、パナリ焼だけではありません。沖縄本島から派遣された陶工により開かれた瓦や陶器の窯があり、そこで生産については、古文書にも残されています。ここでは、現在、石垣島で確認されている窯跡の事例を紹介します。

(1) 瓦窯跡

1) 名蔵瓦窯跡 (図34)

石垣市字名蔵にある神田橋の近く、サトウキビ畑の中に、窯跡は残ります。

「八重山島年来記」という古文書の1695（康熙34）年の項に、

一、蔵元瓦葺之訟相済、瓦細工御雇ニ而名蔵かま仕立、作様当島之者共江稽古させ候也

という記述があり、この年に名蔵瓦窯が築窯されたことが確認できます。同文書には、翌年、蔵元（当時の役所）が瓦葺きになったことも記されます。

石垣市教育委員会が実施した発掘調査では、比較的保存状態の良い窯体を確認されたほか、物原（焼物が廃棄された場所）からは、多くの灰色瓦が出土しました。

なお、名蔵瓦窯について、1731（雍正9）年には、

一、瓦之儀、壺焼かまニ焼達候付、名蔵かま召留候、慶田川壺焼かまニ而やきいて候とあり、この年に廃窯となり、同時期に「慶田川壺焼かま」が操業されていることが、確認できます。



図34 発掘された名蔵瓦窯跡（石垣市）

(2) 陶器を中心とした窯

1) 黒石川窯跡 (図35)

石垣市字大川にある窯跡で、昭和56年に、県営宮良川土地改良事業所による圃場整備に際して発見されました。昭和63年度から平成4年度にかけて、石垣市教育委員会による発掘調査が行われています。

その結果、ほぼ同一地点で改築を重ねた6基の窯跡のほか、これを囲む石牆（せきしょう：石で造られた垣根）、物原、粘土を採ったと思われる穴などが見つかっています。ここでは、瓦だけでなく、壺、甕、鉢類、徳利、碗、急須などのほか、陶器を作る際に利用する窯道具も多数見つかっています。

ここは、先に紹介した、「慶田川壺焼かま」であるという研究があります。それによれば、慶田川壺窯は、「参遣状」という古文書の1730（雍正8）年の「覚」に、

当島壺焼之儀、夫丸太分入候付而御国より詔下候より却而不勝手シテ可有之哉、勿論土産仕出候儀ハ島中之重宝候得共随分致吟味、手入旁減候様ニ口被仰付置候、然者右之儀試申候処此様相立候、壺焼所之儀、薪木取所、土取所、遠方之役人夫太分相込申候、依之黒石川与申所右之便能御座候ニ付、吟味之上其所江去年引移申候ニ付、夫丸相減申候、且又貯蔵之儀ハ可成程瓦葺ニ仕候様ニ与被仰付候付而為士試壺かまニ瓦焼させ候得者能有之候、然者壺焼所之儀、島中重宝ニ相成候間、弥相立候而可然哉与奉存候

という記述があることから、1731年に慶田川壺窯があり、かつ、1730年に黒石川というところで開窯されたことと考え合わせると、古文書に見られる2つの記述が、この窯を示していることが



図35 発掘された黒石川窯跡（石垣市）

確認されたのです。

この窯がいつ廃窯になったのかはわかりませんが、石垣島だけでなく、沖縄諸島の窯業史を知るためにも重要な遺跡として、平成24年8月3日に石垣市指定史跡となりました。

2) 阿香花窯跡

石垣市字石垣にある窯跡で、昭和58年度にバンナ岳南西麓の阿香花地区で土地改良が実施された際に発見されました。発見直後は、窯壁の立ち上がりなど、窯体の一部も見られたそうですが、現状では草に覆われて確認することはできません。

しかしながら、周辺の畑から多くの陶器片が採集され、中でも1991年に表面採集された陶器片(図36)には、「雍正四年丙・・・」の文字が確認されました。雍正4年は1726年にあたり、これは、1730年の「慶田川壺焼きかま」の記載よりも古なることがわかってきました。

では、この窯に関する古文書記録はないのでしょうか？

阿利直治(阿利1993)は、これらの窯について古文書記載との照合を行い、「八重山島年来記」の1724(雍正2)年の項にある記載を紹介しました。それは、次のようなものです。

一、当島之儀、かめ・壺琉球より買下り不自由ニ而、石垣にや存寄壺焼稽古ニ而罷下、剩土会彼是為試、壺細工仲村渠筑登之列下り、山田平等かま仕立、夫より慶田川江引越、大かま仕立候事

ここには、この年に、石垣仁屋という人物が、沖縄本島(琉球)から、仲村渠筑登之(致元)を八重山に連れてきて、山田平等というところに築窯したことや、その後山田平等というところにあった窯が慶田川へ引越して、大きく作り直されたことが記されています。

慶田川に越したのが、1730年だとすれば、その前の年代が得られているこの阿香花窯こそ、山田平等窯であろうとの見解が示されたのです。現在は、この阿利の考えに賛同する研究者が増えています。

なお、この窯がいつまで操業されたのかは定かではありませんが、仲村渠致元の帰島が、1727(雍正5)年であることから、この頃までは操業していたのではないかと考えられています。

3) 平田窯跡

石垣市字石垣の水田地帯、通称平田原の北方にある窯跡ですが、現在は、民間企業の火薬貯蔵施設となっているため、立ち入りが制限されています。

この火薬貯蔵施設周辺から、瓦や陶器、窯道具、窯壁の破片などが採集されています。

この窯については、古文書である「八重山嶋壺方例帳」の1755(乾隆20)年の「取払帳表」に、

一、上夫四拾七人九分三厘八毛

内

拾老人壺分石城ヨ黒石川平田壺瓦方両所之間江石砂三石七斗持越老人ニ而三斗ツゝ往来六度壺度ニ付五升ツゝ

壺人式分五厘八毛石砂割老人ニ而式石九斗四升壺合ツゝ

式人三分かま拵并石積迄

拾六人かま焼人足四人之式日式夜ツゝ

拾四人三合五厘式毛薪木百七拾九束四合割老人ニ而拾式束五合ツゝ

式人五分式厘八毛石灰三石六斗取出シ水懸迄

とあり、黒石川窯と共に記載されています。また、1771(乾隆36)年に八重山諸島を襲った明和・大津波の記録である「大波之時各村之形行書」には、

一、小与座、紙漉并茶園方、平田壺方三ヶ所前々之通無別条候

と、平田窯に被害がなかったことが記され、この時期にも窯が操業していたことが分かります。なお、ここも、廃窯について、明確な時期は分かっていません。



図 36 阿香花窯跡採集の陶器片

4) 高山壺跡 (図37)

石垣市宇宮良にある窯跡で、宮良橋の北方にある緩やかな丘陵地に位置しています。

新城剛の報告(新城)によれば、同地には、3つの窯があったそうです。東側から山盛カワラヤー、前花カワラヤーがあり、それぞれ昭和24年頃と大正10年頃にあわせて開窯されましたが、昭和40年頃には廃窯されたそうです。

一番西側にあった高山壺屋は、昭和54年頃までは、窯体が残されていたそうですが、現状では、その様子をうかがうことはできません。しかし、今でも、部分的に壺や甕、瓦といった破片が多く見られます。

この窯跡がいつ頃からあったのかはわかりませんが、少なくとも1830年頃には官窯として生産を行っていたという指摘があります(池田1995)。しかしながら、先出の「八重山嶋壺瓦例帳」で「高山壺方」という記載が見られるのは、1846(道光25)年の記載からであり、いつ頃からあったのか、ということに関しては、まだまだ議論の余地がありそうです。



図37 高山壺屋窯跡で見られる遺物の散布

11. まとめにかえて

ここまで、八重山諸島の考古学について簡単に紹介して来ました。掲載されなかった遺跡や遺物についても、多くの研究がなされています。また、石垣市史編集課から、『石垣市史考古ビジュアル版』というシリーズが7冊発刊され、できる限りわかりやすく、また、専門的なレファレンスにも対応できるようになっています。

この連載を期に、八重山諸島の考古学について興味を持っていただけましたら幸いです。

埋蔵文化財も、石垣島にあるたいせつな文化財です。皆様のご協力のもと、調査がなされ、保護活動がなされます。ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

<参考・引用文献一覧>

- 新城剛 1977「八重山における窯業史の概観」『石垣市立八重山博物館紀要』創刊号 石垣市立八重山博物館
阿利直治 1993「沖縄県石垣市山田平等、慶田川窯址、黒石川窯址」『黒石川窯址—沖縄県石垣市黒石川(フーシナ)窯址発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書 第15号 石垣市教育委員会
池田榮史 1995「附章 八重山の窯業史について」『生産遺跡分布調査(Ⅰ)—県内生産遺跡分布調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第119集 沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会 1995『生産遺跡分布調査(Ⅰ)—県内生産遺跡分布調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第119集 沖縄県教育委員会